

TANBO

さぎ山記念館、加田屋たんぼ、新加田屋たんぼ

都市と田園が自然に隣合う埼玉県。高層ビルが立ち並ぶ新都心や大宮駅からほんの数kmのところに、見沼代用水によってつくられる広大な田園風景と生き物を育む豊かな自然が残されています。TANBOプロジェクトでは、見沼たんぼで貴重な稲作体験提供や伝説の巨大積みわら「フナノ」の復興・伝承を手がけてきた「見沼ファーム21」や「ファーム・インさぎ山」との共催により、学習会「フナノ学校」やさまざまなアートプログラムを展開し、食・農・自然・環境との調和とともに考える機会としました。

アーティストのみなさんは水ぬるむ4月に初めて見沼たんぼを訪れて以来、何度も現場に足を運び、田植えや草取りから稲刈り、収穫祭まで、農の営みに寄り添いながら、「NOW-農はアートだ！」をコンセプトに、互いの創造性を呼び覚まし共有することを目指して活動しました。稲穀燻炭野焼き、巨大藁紙漉きなど、大地から生まれた豊かさにさまざまなかたちを与え、再び大地に還すアーティストの今回の活動は、豊饒の象徴として晩秋の野に立ち上がり、無駄なく活用されて大地に還っていくフナノとも通じるものでしょう。「フナノ保存会」設立の年にこのような協働が実現したことは非常に意義深いものと思われます。

中村誠（事務局）

フナノ学校／会場：さぎ山記念館

第1回：10月29日（土）「食」の学習会・試食会「見沼地域の郷土食を知り、食べてみよう」

松成容子さん（食育研究会MoguMogu代表）を講師に迎えた「食」の学習会・試食会。見沼の味の依頼を受け、見沼周辺の「埼玉ふるさと味の伝承士」の協力を得て、料理提供をさせていただきました。収穫したてのハツ頭やずいきの煮物、赤飯、きゅうりやはやとうりの漬け物、まんじゅうなど、参加者のみなさまから大好評をいただき、伝承士一同、さらに研鑽を積み見沼の味を継承して参りたいと思いました。（参加者：30名）

萩原知美（ファーム・インさぎ山代表）

第2回：11月5日（土）「藁」の学習会「藁はお米の親なもの～藁の話～」

見沼たんぼの藁塚「フナノ」製作を前に、勉強会「藁はお米の親なもの」を開催しました。講師は「藁」研究の第一人者として知られている千葉大学名誉教授・宮崎清さん。同氏は40ページもの当日の資料を準備、配布し、今も奥会津で行われている小正月での藁を大切にした行事からひも解き、藁との人々の暮らしや歴史、文化について内容の濃い講演でした。講演後の話し合いで藁が活用されてきた事例が話題になり、TANBOプロジェクト参加の藁アーティスト柳井嗣雄さんが藁紙を披露され、見沼メンバーとアーティストの交流が深まる機会となりました。（参加者：30名）

島田由美子（見沼ファーム21代表）

第3回：11月6日（日）「環境カフェ」「生物の多様性レイチェル・カーソンから始まる環境意識」

レイチェル・カーソン（米1907-1964）はその著書「沈黙の春」（1962）で、農薬に使われる化学物質の危険性を訴え、環境運動の先駆けとなりました。講師の多田満さん（国立環境研究所研究員）は、この著書から重要なセンテンスを引き出しながら、我々に質問を投げかけます。そのひとつを田んぼの生物社会について引けば、イネを生産者に置き、有機物の分解者に対する消費者として高次動物の補食関係を説明したうえで、イネが育つ自然の力、土や水、太陽の光、空気、働きにある生命の力を確認し、農事の役割を示しました。（参加者：12名）

吉田富久一（社会芸術/ユニット・ウルス）

“農はアートだ！”現場展報告

私たち社会芸術/ユニット・ウルスではアート活動の一環として炭焼きを始めて以降、根源的な考え方として縄文思考「創造性の共有」を持ち、農耕に注目するようになります。農と関わり、生活に役立つアートのあり方

に「創造性のかたち」を、次第にはっきりと見出しました。

長い時間をかけて培われた大地と人との関係には持続的な営みと創造性が連鎖します。「田んぼはお米の母、稲は田んぼの父」と言われ、米以外でも稲の全てが役に立ち無駄はありません。かつては、稲藁は堆肥となり、生活の資材であり家畜の飼料でした。稲穀は燻炭に焼かれ、バクテリアを細孔に住わせて地力を養い働きを助け、土壌造りに欠かせません。ところが、現在ではその多くが農業残滓として破棄されています。

本プロジェクトでは、島田由美子さん（見沼ファーム21代表）の協力を得、田植えから草取り、稲刈り、収穫祭までを立ち会う機会が得られたことで、農事（水稻農耕）への理解を深めつつ、現場展の準備が進められました。我々は、稲穀で燻炭を焼く涵養な働き掛けと、緩やかに場を仕切る巨大な藁紙づくり、この二本を柱に据え、温故知新を踏まえた循環再生の根源に縄文を思索し、茶の湯で時空の結びつけを図りました。

有機栽培に関わる人たちは共助の精神を回復させ、未来への展望を共有しています。そこで我々は期待をもって臨みました。ところが、はじめファーム内部ではアートが自己表現と受けとられ、田んぼが荒らされる危惧を抱かせたようです。それでもアートの農に向けた体现を進め、すこしずつ事態の好転を促しました。

稲刈りが近づいた9月に、安部大雅、長谷川千賀子、吉田富久一3名が担当する土器ダクトの制作がなされ、参加した市民有志の方々と共有体験が得られました。続いて稲穀など資材調達し、紙作業場のパイプハウスが立ち上がると、徐々に風向きに変化が起こります。この辺りはファーム側において粘り強い伴走者を演じていただけた岡村峯人さんの助力に頼るところが大きい。さらに、10月に土器を野焼き焼成しその後の紙づくりを控え、藁の煮沸に使う草木灰の環境的影響について意見交換され、一定の理解が得られたことが転換点となり、牽制し合ったすれ違いが瞬時に解消したように思えます。

11月に入ると、紙造形作家の柳井嗣雄が中心となり田んぼの片隅に大きな舟を設営し、幅1.6m長さ10mに及ぶ紙を漉く準備が進められました。切り藁は煮沸し繊維を叩いて潰し紙素材に仕込まれていきます。これにベルリンから駆けつけた磯益子が手助けしました。この頃から、手弁当で駆けつける友等の応援があり、連日散歩に立ち寄る近隣の方々からの声援を受け、隣の田んぼで藁積み《フナノ》の準備が進められたこともあってか、カメラマンが訪れ記録に収められていきます。

11月12日はいいよ大なる藁積みのお披露目「フナノ祭」当日、「現場展」も開幕しました。稲穀山に据えられた土器ダクトの口へ火種が落とされ、野焼きがはじまりました。次々と立ち上る様は歓喜の狼煙のようです。それを受けとめるかのように藁熟紙と名付けられた巨大な紙が作業場を覆う壁として姿を現します。夕刻に吉川信雄はこの紙壁に煙の映像を投影しました。翌13日まで、8つの燻炭山が煙を吐きつづける中、見学ツアーの客等で賑わい、磯による気功パフォーマンスが花を添えています。

この二日間を通し、森山哲和の縄文茶舞台で長谷川律子が野点を行います。縄文遺跡の石組みを象った茶舞台と茶の湯の炭炉とが同じ配置であることから、一服のお点前は縄文と利休を、そして里山の暮らしを今に結びつけます。縄文を思索し、蕩尽の心根を確かめる機会を甦らせたのです。（現場展来場者：2日間計110名）

さらに得難いことは、ファーム・インさぎ山の萩原知美さんから次期展開へ向けた要望が出されました。「創造性のかたち」に帰結する感謝にiggなわれた出来事が重ねられました。

吉田富久一（社会芸術/ユニット・ウルス）

社会芸術/ユニット・ウルス 参加メンバー：吉田富久一/社会芸術代表、長谷川千賀子/野焼きアースワーク担当、吉川信雄/世界小屋会議担当、宮下貴史/現場展担当、柳井嗣雄/紙アースワーク担当、安部大雅/土器ダクト型アースワーク担当、多田満/環境カフェ担当、磯益子/気功パフォーマンス担当 協力：森山哲和/縄文茶会担当、長谷川律子/お点前担当、田中文太/ウェブ担当



フナノ



食の学習会・試食会



藁の学習会



環境カフェ



田植え



藁の煮沸（柳井嗣雄さん）



藁紙漉き



藁熟紙のスクリーン



土器ダクト制作



土器ダクト野焼き



稲穀燻炭焼き準備



稲穀燻炭焼成中



稲穀燻炭野焼き



田んぼで世界小屋会議



田んぼで縄文茶会



田んぼで縄文茶会